



JBOが国内統一のボウリングボール規格附則を制定 8月1日からボールに関するルールが変更

ワールドボウリングは昨年9月、競技ルール改定を行ったが、国内8団体が参画する日本ボウリング機構(JBO)でも、それに伴い2020年8月1日より「ボウリングボール規格附則」の内容を適用することを決定した。その規格附則の詳細は、JBOのホームページでご確認いただくとして、ここではボウラーに直接かかわってきそうな変更点を中心に、日坂義人さんに解説をお願いした。



▲解説・日坂義人氏
(JBO国内統一ルール制定委員会委員)

変更点は下記の3つ。

●ボールのスタスティックバランスの変更(左表参照)

ボールのリアクションに影響をもたらすバランスホールが禁止された。それに伴い、10ポンド以上のスタスティックバランスのルールが、現行の3オンス(トップ・ボトム)1オンス(レフト・ライト)1オンス(フロント・バック)から、オール3オンスに変更された。

ボウラーにとって大きな変更ではないが、メーカーの実験では、スピードのないタイプや回転の少ないタイプは逆に、オール3オンスに拡大することによって、ポケットへの入射角が若干増えるなど、プラスに影響する場合もあるようだ。

●両手投げ・サムレスのグリップ方向指定(右図参照)

サムレススタイルは、ボール

をグリップする際の方向を明らかにするため、手のひらで隠れる位置に(+)マークを刻印しなければならない。

これまでのルールでは、サムレススタイルのボウラーは180度ひっくり返しても投げることができたので、バランスをうまく使えて有利ではないかということで、握る方向を指定するルールが設けられた。



▲グリップ方向を明らかにするために、手のひら側で隠れる位置に(+)マーク(大きさは1cm以上2cm以内)を刻印しなければならない

●使用する指穴以外はバランスホールとみなされ、バランスホールは認められない。

指穴はすべて使用しなければならなくなり、使用しない穴は空気孔以外はバランスホールとみなされる。

これまで、サムレスで親指を入れなくても、手に隠れる位置にその穴があれば、3ホールのバランス規定が適用できたが、

今回のルール変更では、指を入れない穴はバランスホールとみなされ、禁止となった。

その他の変更点としては、ボールのオイル吸収に対する規制などがある。これはボールメーカーに対し、ボールのオイル吸収時間に対する製造上の規制を設けたものだ。

この数十年、ボールのカバーストックが強くなるからレーン上にオイルを多くまく、多くまかれるからさらにカバーを強くするというようなせめぎあいのなかで、オイルの量は右肩上がりが増えていった。それが最初にも触れたような、ボウラーのタイプによる有利不利という問題を生じさせているために、オイルをもう少し制限しようというのが、USBCの考え方のようだ。

日本では8月1日より適用となっているが、JBCはすでに1月から適用しており、JPBAは、移行期間なしで8月1日から新ルールを適用するなど、団体ごとに対応が異なっているので、各ボウラー団体に確認してほしい。いずれにしても今使用しているボールは、バランスホールをプラグすれば、問題なく使用できるはずだ。

スタスティックバランス(静的バランス)のルール

測定部分	10ポンド以上	10ポンド未満 8ポンド以上	8ポンド未満
トップボトムの差 ●天地の差	3オンス以内 3オンス以内	2オンス以内	
レフトライトの差 ●左右の差			
フロントバックの差 ●前後の差			3/4オンス以内
サムホール無し ●いずれの半球においても	1オンス以内 3オンス以内	3/4オンス以内	
フィンガーホール無し ●いずれの半球においても			
指穴くびみ無し ●いずれの半球においても			

全米ボウリング協会(USBC)主導による今回のルール変更に至った要因は、○高回転ボウラーの増加、○ボールのカバーストックの強化、○レーンオイルの増加 などの環境変化が理由である。

例えばレーンの変化が激し

ぎで、ディーフィンサイドへのアジャスト、ときにはガターを飛び越えての投球を強いられるなど、変化が早すぎることで、スポーツの公平性が保てないとの議論の高まりが背景にあったようだ。

ボウラーに直接関係しそうな

FOCUS UP

温かみのある似顔絵イラストでボウリング界に貢献する“マルチ画伯”

近年、主に関西地区のボウリング場で開催される“プロチャレ”などのイベントにしばしば出没し、スコアシートを掲示するホワイトボードの裏面にプロボウラーの似顔絵を「落書き」して関係者やギャラリーの目を楽しませている御仁がいる。専門誌『ボウリングマガジン』(ベースボール・マガジン社刊)でもお馴染みのイラストレーター・太井潤一さんだ。

本来の肩書は「洋画家」。油彩画、水彩画ともにこなす“マルチ画伯”で、絵画展への出品は無論のこと、街中の風景や人物をスケッチしたペン画の個展を開くことも。ときに飲食店のナブキンやコースターがキャンパスがわりになったりもする。

デパートなどの催事場で似顔絵描きのイベントをするときは

色鉛筆を使用。普段描いているイラストは「グッズのデザインに使ってもらったりするので、修正やデータのやりとりがしやすいパソコンを使って描くことが多い」という。

「残念ながら絵画だけでは食べていけません。昔も今も、主な収入源は似顔絵やイラストのほうですね(苦笑)」

太井さんは大学時代に画家を志し、アルバイトをしながら作品づくりに励む傍ら、子供のころからの趣味であるプロレスのイラストを一愛読者として専門誌に投稿。たびたび採用されて誌面を飾っていた。

あるとき、それが某女子プロ団体関係者の目にとまり、所属選手のグッズ用に似顔絵を提供するように。一方、ボウリング界とは今から10年以上前、『ボウリングマガジン』がP★リーガーの連載企画をスタートするにあたり、イラストを依頼してきたことで縁が繋がった。

ちなみに、本紙で「Dr.塚田の健康コラム」の挿絵を描いている青木猿類さんとは「仕事も趣味も同じ」旧知の仲だという。

センター公認の「落書き」

ボウリングに関しては「長いこと編集部が送ってくれる参考画像を見て描きだした」が、3年ほど前に大阪のセンターでもP★リーガーのチャレンジマッチが頻繁に開催されていることを知り、「実際に投げているところを見て表情などを観察したほうが、いいものが描ける」と、仕事の合間を縫って“プロチャレ巡り”をすることに。

「ボード裏のイラストは、東大阪のボウリングスペースヒットさんに鶴井亜南プロ(47期)のチャレンジを観に行ったとき、ふと描きたくなって勝手に描いたのが最初です。たしか鶴井ブ

ロが好きだという担々麺を、“流しそうめん”のようにして食べている絵を描いた記憶があります」

頼まれて描いたわけではなく、きっちり描いたものでもない、いわば「落書き」。消されて当然だし、自分としても残しておいてほしくなかったが、「次に行ったときに、まだその絵が残っていて驚いた」そうだ。

以来、ボード裏の落書きはセンター公認となり、「はっきり頼まれるわけではないけど、どこへ行っても描かなくてはいけない雰囲気になってきた」と苦笑する。しかし、多くのプロやギャラリーが太井さんの顔と作品を覚えてくれるようになり、「プロにグッズのイラストを頼まれたり、ファンの人が『プロにプレゼントしたい』と似顔絵を頼んでくることもある」というから、生来シャイで控え目な性格の太井さんにとっては「結果的に大正解」のプロチャレ巡り、落書き行脚となった。

似顔絵というのは、大なり小なりモデルの特徴をデフォルメして描かれるものだが、決して



▲取材日の前日、ボウルアロー松原店のボード裏に太井さんが描いたイラスト(本人のFacebookより)

露悪的ではなく、常に温かみを感じさせるのが太井さんの作風。

「これからも、自分が描きたいと思う絵を楽しみながら描いていって、見てくれる人にも楽しんでもらえたらそれでいい」とあまり商売っ気はないが、引く手あまたの状況はこれからも続きそうだ。

「じつはつい先日、ラウンドワンの堺駅前店で初めてマイボールを作って、今それで練習をしているところ。自分で投げてみて気づくことも多いですね」

近い将来、ボードの前ではなくプロチャレのアプローチに立つ太井さんが見られるかも!?

たい・じゅんいち/1974年11月22日生まれ、大阪府出身。関西大学工学部卒。洋画家、イラストレーター。一般社団法人東光会会員、堺美術協会会員。



▶3月23日、大阪・ボウルアロー八尾店にて取材